プレコンセプションケア⑥

妊娠する前に知っておきたい
女性の特有の病気のこと

卵巣腫瘍（しゅよう）

女性特有の病気(婦人科疾患)について

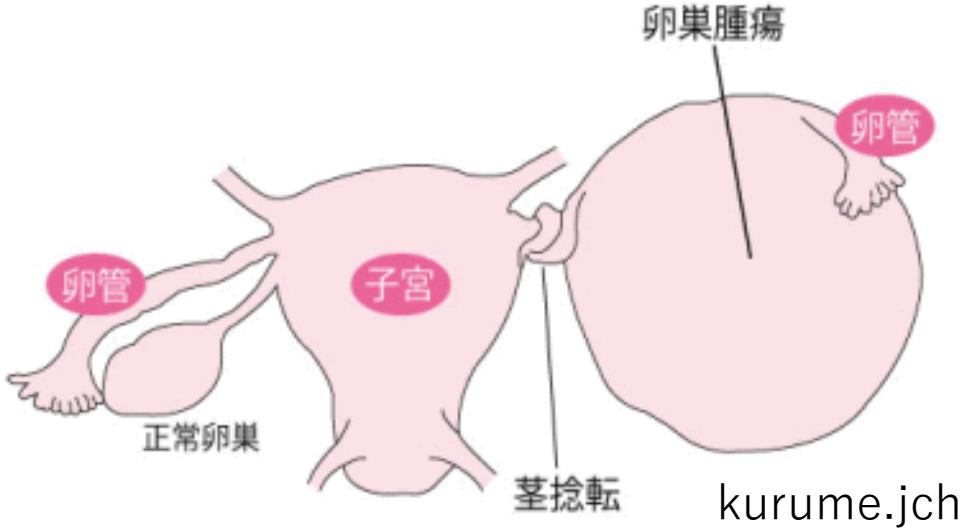
- 女性特有の病気があります。頻度は低くても妊娠の成り立ちや妊娠経過に影響する場合があります。
  これらの病気の影響を

①その病気が妊娠に与える影響
②妊娠がその病気に与える影響

にわけて考えます。

今回は、卵巣腫瘍(しゅよう)についてです。

卵巣腫瘍とは？



kurume.jcho.go.jp

- 卵巣のはれもの
- 超音波検査で良性・悪性のおおよその検討はつくが、悪性が疑われる場合は、さらにMRI検査が必要
- 卵巣腫瘍は、良性、悪性、境界悪性の分類があり、病理学的診断（病理医が顕微鏡でみて診断）が確定診断

妊娠前に卵巣腫瘍がわかった場合

- 健康診断で偶発的に卵巣腫瘍が診断されることがある
- 通常、卵巣は腫れても痛みはない
- 超音波検査にて、大きさや見え方を評価し、良性、あるいは悪性も疑われるか診断
- 更にMRI検査や腫瘍マーカー検査で精査が必要
  - 漿液性腫瘍（サラサラの水様の内容液）
  - 粘液性腫瘍（やや粘り気のある内容液）
  - 子宮内膜症性卵巣のう胞（チョコレートのう胞）→月経痛や不妊の原因、悪性化もある
  - 奇形腫（脂肪や毛髪、歯、軟骨などを含む）
  - 境界悪性や悪性腫瘍（卵巣がん）
- 長径が5センチを超えるものは茎捻転（ねじれて腹痛を起こす）のリスクあり

➡手術が必要かどうか、妊娠に影響するものかどうか判断する

妊娠後に卵巣腫瘍がわかった場合

➡卵巣腫瘍合併妊娠

妊娠時に偶発的に診断される卵巣腫瘍の90～95%は良性
頻度は、約5～6%

妊娠中でも超音波検査に加えて、MRI検査を実施することもあります

卵巣腫瘍が妊娠に与える影響

- 茎捻転による腹痛、腹膜刺激
- 分娩障害（あかちゃんが産道に入るのを邪魔する）
- 直径5～6センチ以上では、捻転の可能性がある
- 直径10センチ以上では、破裂や分娩障害、さらに悪性の可能性がある
- 妊娠中に手術が必要なケースもある
- 分娩障害となるなら、帝王切開し、卵巣腫瘍を摘出する

妊娠が卵巣腫瘍に与える影響

- 妊娠初期に一時的に腫れている「黄体嚢胞（ルテイン嚢胞）」がある　直径5センチ以下なら80%はこれ。妊娠16週までには消失する。
- 茎捻転は、妊娠3～5か月、分娩直後、産褥期におこりやすい

参考：産婦人科診療ガイドライン　産科編　2023

1.　子宮頸がん検診の時に、婦人科超音波検査も受けましょう。
触診だけでは、卵巣の腫れは評価できません。

2.　妊娠初期の診断時に、超音波検査で卵巣の腫れがないかどうか
診てもらいましょう

3.　おなかが出てきた、スカートがきつくなってきたという場合、
「太ったなあ！」と早合点せず、卵巣腫ようや子宮筋腫が
大きくなっていないか産婦人科クリニックを受診しましょう

（作成：林和俊）